

令和7年度「静岡県産業教育振興会教員特別研究」報告

研究題目：科目「農業と環境における」5S活動を用いた実習授業の改善

静岡県立静岡農業高等学校 実習教諭 亀山 裕史

I 研究内容

本校には、1年生共通科目「農業と環境」の実習授業で利用する農具等が収納された農機具庫がある。以前は育苗ハウスとして使用していたが、現在は農機具庫として区画の一部のみ使用している。現状では農機具庫の利用状況は整理整頓が徹底されず動線も悪いため効率性・安全性が課題となっている。また、未利用個所がデッドスペースになっている。

そこで、GAP（生産工程管理）や5S活動の取り組みを参考に、実習指導の一環として生徒とともに農機具の管理方法を改善することで、生徒や職員が「安全」「安心」「快適」「効率的」に農機具庫を有効活用し、次代に即した生産管理方法改善を図る研究を行う。

II 研究方法

(1)実習授業で使用している農機具庫の確認

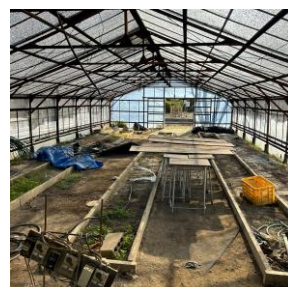
農機具庫北側入口付近(北側)に農具・資材が配置され動線が悪く、農機具庫南側の未利用個所となっており農機具庫の半分はデッドスペースになっている。



写真① 農機具庫外観



写真② 農機具庫内 北側

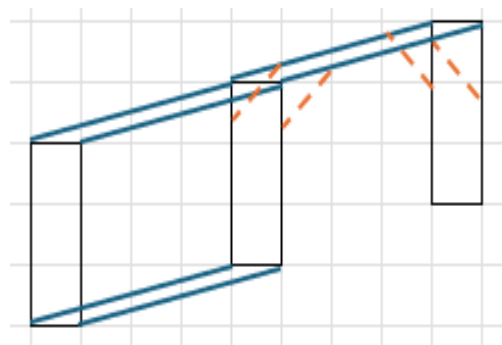


写真③ 農機具庫内 南側

(2)農具を整理整頓する棚の設計図

予算3万円内で棚を製作するため設計図と購入資材数の確認を行った。

今回は主に建設業の現場で足場に用いられる単管パイプとクランプを使用する。



写真④ 棚の設計図

(3)使用する資材及び道具

「資材」・クランプ(直交)…24 個・クランプカバー…12 個

・単管パイプキャップ…2 個・単管パイプ…4m×10 本・単管パイプ… 1m×1 本

「道具」・コンベックス(メジャー)・シノ付きラチェットレンチ・水平器・高速切断機



写真⑤ 単管パイプ



写真⑥ 高速切断機



写真⑦ 道具類

III 研究結果

(1) 単管パイプとクランプを用いて農具を整理整頓する棚の完成

設計図通りに単管パイプを切断し設定した角度に注意し単管パイプにクランプを取り付け、棚を製作した。

(2)棚に小農具を収納した様子

改善前と改善後の設置場所や棚を比較すると改善後の棚は整理整頓され 動線も良く生徒や職員が有効に活用できる。



写真⑧ 完成した収納棚

IV 考察

今回の研究活動では、5S 活動「整理・整頓・清掃・清潔・躰(習慣)」の基礎基本となる、2S 活動「整理・整頓」を行った。

2S 活動を行うことで他の 3S「清掃・清潔・躰(習慣)」も意識付けされ生徒や職員に良い循環が生まれたと考えられる。



写真⑨ 農具収納の様子

V 今後の課題

今後は、製作した棚や設置場所が、実際に収納しやすいか、動線に無駄が発生していないか、無理なく元の位置に戻せるかを観察・検証し、調整していく必要がある。

単管パイプの棚は簡単に調整できるので改善個所が発見されたら、その都度、改善を図りたい。

令和7年度 静岡県産業教育振興会教員特別研究 研究報告
研究題目：アメリカザリガニの堆肥化による農業的有效活用に関する研究

静岡県立静岡農業高等学校 榎原 宏美

1 はじめに

外来生物による生態系への影響は全国的な課題であり、農業分野においても、水田や農業用水路、ため池等に生息する外来生物が在来生物や作物生産環境へ及ぼす影響が問題となっている。アメリカザリガニは高い環境適応力と繁殖力を有し、生態系への影響が指摘されている外来生物である。

本校周辺に位置する麻機多目的遊水地（あさはた緑地）においても、外来種対策の一環としてアメリカザリガニの駆除が行われており、捕獲個体の多くは廃棄処分されている。

そこで本研究では、捕獲・駆除されたアメリカザリガニを堆肥として再利用し、作物栽培に活用できる可能性について検討した。

2 研究目的

本研究の目的は、①アメリカザリガニをコンポストにより堆肥化し、農業資材として利用可能か検証すること、②作製したザリガニ堆肥を用いたコマツナ栽培試験により、施用量が生育や収量、害虫被害に及ぼす影響を明らかにすることである。

3 研究方法

(1) アメリカザリガニの堆肥化

捕獲・回収したアメリカザリガニを粉砕し、もみ殻燐炭および米ぬかを混合し、水を加えた上でコンポスト容器に投入した。一定期間発酵させることでザリガニ堆肥を作製し、発酵の進行状況や臭気の有無を確認しながら、農業利用が可能な状態となるまで管理を行った。

(2) ザリガニ堆肥を用いたコマツナ栽培試験

作製したザリガニ堆肥を用い、施用量を段階的に変えた複数区のプランターを準備し、コマツナの栽培試験を行った。栽培期間中は発芽数や生育の推移を観察し、収穫後に収量を測定するとともに、アオムシやハモグリバエ等による害虫被害の程度を比較した。

4 結果

(1) アメリカザリガニの堆肥化の結果

アメリカザリガニを粉砕し、もみ殻燐炭および米ぬかとともにコンポストで発酵させた結果、臭気の軽減と分解の進行が確認され、農業利用が可能な状態のザリガニ堆肥が得られた。

(2) ザリガニ堆肥を用いたコマツナ栽培試験の結果

施用量の異なる5区で栽培試験を行った結果、発芽数はいずれの区においても大きな差は見られなかった。

収量については、表1に示したとおり、堆肥無施用区(a: 0.0kg)が168.0gであったのに対し、堆肥施用区ではc区(2.0kg)が242.3g、e区(2.8kg)が240.7gと高い値を示した。一方、b区(1.5kg)は96.0g、d区(2.5kg)は210.0gであり、施用量によって収量に差が生じた。

害虫被害については、アオムシやハモグリバエによる食害が確認され、施用量の多い区で多い傾向が見られた。

表1 ザリガニ堆肥施用量の違いによるコマツナ収量

処理区	ザリガニ堆肥施用量(Hg)	収量(g)
a	0.0	168.0
b	1.5	96.0
c	2.0	242.3
d	2.5	210.0
e	2.8	240.7



写真1 d区 食害の様子

5 考察

飼育観察の結果から、アメリカザリガニの行動や生理的变化には、餌条件だけでなく水温や水質などの環境要因が影響している可能性が示唆された。

また、コンポストによる堆肥化により、外来生物由来の有機物を安定した農業資材として利用できる可能性が確認された。

コマツナ栽培試験では、ザリガニ堆肥を適量施用することで収量が増加した一方、過剰施用では害虫被害が増加する傾向が見られ、施用量の調整が重要であると考えられる。

6 まとめ

本研究では、アメリカザリガニの生態観察、堆肥化、栽培試験を通して、農業資材としての有効活用の可能性を検討した。

その結果、コンポストによる堆肥化が可能であり、適切な施用量を守ることによってコマツナの収量増加に寄与する可能性が示唆された。一方で、害虫被害といった課題も確認された。

今後は、本研究の成果を授業や課題研究指導に活用し、資源循環の視点を取り入れた農業教育の充実につなげていきたい。

「校外茶園の再生に挑む（かん水装置の作製）」
～陸ワサビの導入～

静岡県立静岡農業高等学校
教諭 山中 浩典

1 はじめに

本校生産流通科生産ビジネス系列（茶業専攻）では校外茶園 30a、校内茶園 10a および 35kg ライン規模の茶工場で栽培、加工及び販売までの自園自製自販を行っている。

校外茶園においては、約 1,000kg の茶葉を収穫している。近年の台風・集中豪雨等の異常気象による被害で、一部の茶園斜面に土砂崩れが発生し、茶樹が流出する等の被害を受けている。栽培を放棄した茶園や林間地が存在し、安全面はもとより景観も非常に悪くなっている。そこで茶園斜面等に林間地であるという環境を利用できる、「陸ワサビ」等の茶以外の作物の栽培に取り組み、科目「地域資源活用」の教材として活用することを考えた。また同時に、茶園の整備、景観の改善のため「アジサイ」等の植栽にも取り組んでいる。

活動を推進するにあたり、茶園や林間地斜面等にはかん水施設がないため、簡易のかん水装置を作製することにした。

2 活動場所について

活動場所を図 1 に示した。この場所は私たちが「倉庫裏」と呼ぶ茶園である。両側に斜面があり、特に陽当たりが割る場所である。

(1) 赤色丸で囲った所は、茶樹が流出し、栽培放棄した茶園である。

(2) 黄色丸で囲った所が、土砂崩れが発生した林間地斜面であり、栗を植栽してある。

今回はこの場所で活動に取り組んだ。

3 活動内容

(1) 「陸ワサビ」の栽培経過

①播種：2024 年 11 月 16 日に実施。100ppm ジベレリン処理後、5℃の環境下で 5 日間催芽処理し、その後育苗マットに移植。

②鉢上げ：2024 年 12 月 6 日に実施。

③定植：校外茶園の黄色丸で囲った林間地斜面に 75 株を定植した。



図 1. 「倉庫裏」茶園の様子

④かん水管理：定植後5日間、その後は週一回のペースでかん水を行った。かん水は図1に示した、赤線の行程（距離約70m、高低差約15m）をジョウロを手に持ち斜面を登り行った。特に、夏季休業中は当番制で実施したため、斜面を何往復もする必要があり、大変苦勞した。

(2)「陸ワサビ」の栽培の結果（成果）

今夏の猛暑や集中豪雨のため、多くの株を枯死させてしまった。残った株についてもかん水が不十分ため生育が悪かった。今回は科目「課題研究」でのワサビ茶の作成に利用できただけであった。現在、定植した75株中20株が残っている。

今回は黄色丸の部分の土砂崩れの後を整備し、圃場を作り陸ワサビの栽培を行った。

(3)かん水装置の作製・設置

かん水に苦勞することは予想できたことであり、夏季休業前でのかん水装置の作製を計画していたが、集中豪雨の被害、除草、不必要な樹木の伐採等のため2学期以降になってしまった。

かん水装置は、図1の黄色線のルートでホースを繋ぎ、最後はかん水チューブを取り付けた。高低差があり水圧の関係で十分な水が出ないと心配したが大丈夫であった。

また、かん水装置を設置するにあたり、新たな圃場づくり、斜面への階段の設置も行った。

3 考察及び今後の課題

(1) 今回のかん水装置の作製・設置を含め、校外茶園の整備は3年目の活動となるが、完了するまでは長い期間が必要となるが、生徒とともに地道に続けていきたい。かん水装置の設置ルートを確保するために急斜面を登る、樹木をチェーンソーで伐採するなど危険な活動、2025年秋ごろより近隣でのクマの出現等があり安全確保のため十分な配慮が必要が発生した。

(2) 「陸ワサビ」の栽培についての、知識・技術の習得の必要性を痛感した。今後は培の現場での研修等の実施を考える。また、「陸ワサビ」の利用法の研究も必要である。

(3) 校外茶園の景観改善のため、今年度「アジサイ」や「コキア」の植栽も行った。このかん水管理にも、かん水装置を利用したい。



図2. 定植後のかん水の様子



図3. かん水装置設置の様子

令和7年度 静岡県産業教育振興会教員特別研究
地域資源を活用した探究学習の実践

静岡県立田方農業高等学校
教諭 小杉健作

1. はじめに（研究の目的）

静岡県函南町に位置する田方農業高校は、120 年以上の歴史を持つ伝統校である。「生産科学」「園芸デザイン」「動物科学」「食品科学」「ライフデザイン」の5学科を柱とし、静岡県東部地域の農業教育の拠点校として、農業から食、福祉まで幅広く教育活動をおこなっている。

本研究では、国立教育政策研究所（NIER）の『学習評価に関する参考資料』に基づき、課題研究において「地域社会と関わるテーマ」を選択することが、生徒の資質・能力（3観点）にどのような変容をもたらすかを明らかにすることを目的とする。

2. 課題研究の現状

本校では課題研究を2年次に1単位、3年次に2単位配置している。生産科学科では2年次にテキスト（「これから始める探究学習」第一学習社）をベースに探究学習に必要な力を身につけた後、3年次でグループごとにテーマを決め、教員の指導の下、探究活動をおこなっている。今年度、生産科学科で取り組んだ課題研究のうち、地域社会とかわるテーマとしたのは下記の5グループである。

ワサビの辛み成分の研究 （＊）	伊豆市のワサビ生産者、沼津市のコメ生産者と協働し、ワサビの茎葉に含まれる辛み成分を活用した除草剤の開発に取り組んだ。
温泉水による野菜栽培 （＊）	熱海市の旅館より温泉水の提供を受け、温泉水を用いたコマツナの水耕栽培を行い、品質の変化を検討した。
サツマイモの商品化 （＊）	沼津市の建設会社と協働し、耕作放棄地で栽培されたサツマイモを活用したアイスクリーム開発をおこなった。商品の加工方法の検討において、沼津市内の牧場、伊豆の国市内の研究所の協力もいただいた。また、社員食堂運営会社と協働して、さつまいものレシピ開発を実施した。
在来作物の保存	御殿場市等の在来作物生産者と協働し、在来作物の増殖試験やヒアリングをおこなった。
竹灯籠の制作	放棄竹林を解消するべく、伊豆の国市内の竹林から得られた竹を使い、竹灯籠を制作した。作品は江川邸でおこなわれたイベントにて展示された。

※（＊）は筆者が指導したグループである。

3. 調査のデザインと結果

- 対象：生産科学科3年生 39名（地域連携群：21名、学内完結群：18名）
- 手法：NIERの評価指標を基にした5段階尺度による質問紙調査。
- 調査日：令和8年1月（探究活動のまとめをおこなう時期）
- 評価の観点：
 1. 思考・判断・表現（Q1～Q3：多角的な分析と表現）
 2. 主体的に学習に取り組む態度（Q4～Q6：粘り強さと自己有用感）
 3. 知識・技能の活用（Q7：専門性の社会実装）

評価の観点	設問内容	地域連携群 (21名)	学内完結群 (18名)	差分
思・判・表	Q1. 現場ニーズを考慮した計画	3.76	3.00	0.76
思・判・表	Q2. 多角的視点での分析	3.24	3.00	0.24
思・判・表	Q3. 専門外の人への説明工夫	3.43	3.28	0.15
主体的	Q4. 予想外の結果への粘り強さ	3.33	3.56	-0.22
主体的	Q5. 地域・社会への貢献意識	3.95	3.11	0.84
主体的	Q6. 進路への活用・適性確認	3.00	3.22	-0.22
知識・技能	Q7. 専門知識の現場活用	3.57	3.56	0.02

4. 考察：高校生の学びの変容

39名のデータ分析より、地域連携は以下の3つの変容を生徒にもたらしたことがわかった。

「動機」の社会化（Q5）：最も顕著な差（+0.84）が出たのは地域貢献意識であった。校外の栽培現場や地域住民との交流が、探究活動を「誰かのための探究」へと変容させ、学習の意義を社会的な文脈で捉え直すきっかけとなっている。

「思考」の多角化（Q1, Q2）：現場のニーズを考慮する群は、計画段階（+0.76）および分析段階（+0.24）で高い数値を示した。実験室や圃場内のデータのみならず、地域の現場における社会的な側面や経営的な側面に触れ、「多角的な思考・判断」への変容が起きたと考えられる。

予想外の結果への粘り強さ（Q4）、進路への活用・適性確認（Q6）では差分がマイナスとなった。「動機」が社会化された反面、自身の関心や将来のキャリアを反映したテーマ設定ができなかったと考えられる。小中学校と異なり、地域＝校区＝生活空間とならない高校での探究活動の特徴といえる。個々の生徒の関心やキャリアと地域の課題やビジョンをつなげ、主体的に探究活動に取り組むための工夫が必要である。

【出典】

国立教育政策研究所(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(農業)』

農業科目「生物活用」における授業展開に関する研究

静岡県立磐田農業高等学校

教諭 山崎正訓

1. 研究の目的

本校の生活科学科では、2年次と3年次に「生物活用」が配置されており。その学習内容の授業の充実を目指すことを目的とする。そのために、緑肥・有機物の活用による栽培土壌の改善、作業環境の改善としての洗い場整備、新たな教材の活用、新たな外部団体(幼稚園や保育園等)の受け入れによる交流活動の促進を行う。

2. 研究内容

(1) 土壌の改善

本科の圃場は、粘土質で締まりやすい土壌である。そのため、排水性が悪く根の伸長が抑制されてしまうため、有機物補給による土壌改善に取り組んだ。1学期は、露地畑で緑肥作物として「ヒマワリ」、ビニールハウスでは「トウモロコシ」の栽培を行った。露地畑のヒマワリは、4月24日に播種し、発芽率92%(播種数200粒、発芽数184粒)と良好で、5月15日に80株定植、6月25日頃に満開を迎えた。1本の乾物重量は200g程になり、米ぬかと共に圃場に漉き込んだ。1か月程で土中での有機物分解が進むと思われたが、晴天により土中水分が少なく分解が進まなかった。そのため、2学期に定植したハクサイで、リゾクトニア菌等による苗立ち枯れ病が66株中12株で発生し植え替えをした。ビニールハウスでは、トウモロコシ(品種:ゴールドラッシュ)を4月17日に150株分(1カ所3粒)を播種した。発芽率は55%(播種数450粒、発芽数248粒)で、7月1日に果実の収穫をした。1本の乾物重量は100g程になり、米ぬかと共にを圃場に漉き込み散水した。高温多湿により有機物の分解が進み、2学期当初では土質が改善された。露地畑およびビニールハウスでの土質の変化を実験した(図1)。試料は、土壌改善前後の土を100cm³用意し、水100mlを投入し保水量を観察した。その結果、改善前の保水量が多かった(図2)。さらに水100mlを投入し、全量が排水されるまでの時間を計測した。その結果、改善後では排水時間が短縮され、土壌の排水性改善が図られた(図3)。緑肥植物による有機物供給で、土壌の団粒化を促し気相の割合が多くなったことで、排水性及び通気性の向上に影響することが確認ができた。



図1 実験の様子

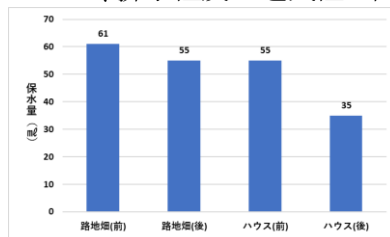


図2 保水量の結果

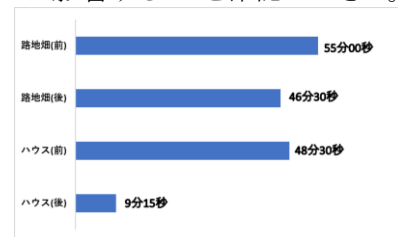


図3 排水時間の結果

(2) 作業環境の改善

圃場の作業環境改善の一環として、洗い場の整備を行った。改善前では蛇口が2つしかなく、通常授業時でも手や道具を洗うために時間がかかってしまい、交流活動実施にも時間的制約になると予想した。そこで、手洗い場を改善することで、授業や交流活動をスムーズに行えるようにしていく。始めに、洗い場周辺の整理整頓を行った。不要物を廃棄し、道具の整頓を行った。その後、既存の蛇口を活用して洗い場の増設を行った。蛇口に25mm水栓ソケットをつけ、13mmの塩ビ管で分岐させ、6カ所の出水口を作成した(図4)。流し台は、中古の容器に穴を開けてその下部に50mmの塩ビ管を配置して、排水されるようにした。また、パレットを敷設して、大きな道

具を洗う際に足元が水浸しにならないようにして完成させた(図 5)。完成後に、通常授業や交流活動で活用し、問題なく使用することができた(図 6)。



図 4 蛇口からの配管



図 5 整備した洗い場



図 6 洗い場の活用の様子

(3) 新たな教材の活用

生物活用では、野菜と共に草花の活用が掲げられており、日常生活でも育てやすい多肉植物を教材として活用することを検討した。多肉植物は、かん水も1～2週間に1度くらいでよく、日常管理も行いやすい。また、増殖能力が高く葉挿し等で容易に増えるため、多くの生徒がいる場合でも扱いやすい。最終的には、寄せ植えや鉢の装飾を行い授業に活用していく。5月に親株を購入し、鹿沼土細粒と培養土を混合した用土に葉挿しを行った。葉挿しの成功率は概ね8割程度であった。しかし、夏に寒冷紗による遮光を行ったにもかかわらず、3割程度が高温乾燥により枯死してしまった。結果としては、増殖が出来た個体は200個程度であり、授業で扱うには数が不足した。また、植物体の成長が緩慢であり、寄せ植えに適した大きさに至らなかった。多肉植物を教材として扱うためには、2・3年の長期的な視点に立った教材の準備や、猛暑への対応が必要となることが分かった。



図 7 鉢上げした多肉植物

(4) 交流活動の実施

生物活用の授業において、中央ながかみこども園と2回の交流活動を行った。第1回は7月に行い、生徒が栽培したスイカやトウモロコシを活用し園児の収穫体験を行った(図8)。第2回は11月に行い、ハウス内で立体栽培したカボチャやダイコンの収穫を行った(図8・9)。2回とも園児の満足度が高く、高校生との関わりが楽しいと答える園児が多く、充実した活動にすることができた。



図 8 スイカ収穫の様子



図 9 空中栽培したカボチャ



図 10 ダイコンの収穫体験

3. まとめ

今回の研究では、授業の充実を目指して取り組んだが、常に課題意識を持ち教材研究と授業改善に取り組む必要性を実感した。また、近年の夏の猛暑への対応策を考えて行かなければ、教材である作物を栽培していくことが難しくなることを理解することができた。

ソーシャルマーケティングの手法を生かした静岡茶商品の開発について（報告）

静岡県立静岡商業高等学校

教諭 田上 美智子

静岡の茶産業は、今年度は荒茶の生産量は鹿児島に抜かれ2位となったが、抹茶の海外需要が伸び、抹茶の取引価格が高騰するのに応じて、緑茶においても一番茶のみならず、二番茶においても価格の上昇が起きた。静岡茶を取り巻く環境は大きく変わってきており、静岡県においては、個別産地をアピールするのではなく、静岡茶の統一ロゴを策定し国内だけでなく海外における知名度向上を図る静岡茶ブランディングプロジェクトが始動している。

今年度は、SDGs とマーケティングを学習した生徒の発案により、ソーシャルマーケティングの手法を生かした静岡茶の販売にチャレンジすることになった。ソーシャルマーケティングとは、企業が自社の利益や顧客だけを考えずに、社会全体の利益や福祉向上を意識して活動するという考え方であり、社会志向で商品開発や販売を行う方法である。ビジネス探究部においては、視覚障がいのある方から日常生活において消費活動に困難さがあるというお話を伺ったことをきっかけに、静岡茶の活動を通して出会った人から得られた知見を発信し、販売商品を通して人にやさしい豊かな社会をみなで創っていこうというメッセージを手紙にしてお茶に添付して販売する方法を考案した。5/10(土)の新茶イベント「茶緑」（場所：青葉シンボルロード）において30点が完売した。「手紙」に興味を持った子供が反応し、ファミリーという新しい顧客層を得た。完売は、開始から1時間29分であり、過去の販売時間を比較して最短を達成し、その後の6/7(土)の済生会フェア（場所：静岡済生会総合病院）では200点を完売できた。

静岡茶に手紙を
セットした商品



新茶イベント「茶緑」の販売の様子



「済生会フェア」の販売の様子



しかし、あるお客様から「お茶を買ったのか、手紙を買ったのかわからない」と言われ、お茶の魅力を高める付加価値をつけた商品としての方向性に疑問が生じた。「お客様に商品の魅力が伝わる」とはどのような状況なのか、という新たな問いの答えを検証するために、学校近くのしずてつストア田町店の協力を得て、「失敗しない買い物のヒントになるかな！プロジェクト」を開始した。生徒が田町店長に行ったプレゼンが成功し実現できた。説得できた理由は、お客様同士をつなげ、新たな商品価値に気づききっかけを創る取り組みであり、物価高が続くなかで、スーパーには売上減少への改善策として、一方、消費者に対しては新たな商品の魅力を体験できる楽しさを味わえ、買い物ストレスが軽減できる方法として、win-winの関係となるという企画への熱意が伝わったからだった。購入後の20名のお客様

から得た回答から実現可能な商品 13 点の POP と店頭用のボードを作成・掲示し、6/30 までの 1 週間の実験を行った。結果は、POP 商品の販売点数は 2,382 点、売上高 557,000 円、利益 289,000 円となり、想定以上の成果を得ることができた。さらに、6 倍の売上増加となったのは、クロス販売を行った商品だった。通常の売り場ではなく、関連商品の近くに販売場所を移し、POP で目立たせた結果、新しい商品同士の組み合わせでの新しい商品用途の魅力を発信でき、消費者の購買を促進できた。調査に基づいた企画が成功し、ビジネスの学びを活用できた実感は大きな喜びと自信になった。このプロジェクトの経験からの学びは、クロス販売という手法が消費者の興味・関心を向上でき、購買を促進できたということである。この効果を活用し、今後は静岡茶を「飲む」から「食べる」という方向転換を行い、粉末茶の販売促進へ研究を進めていくという新たな方向性を定めることができた。

しずてつストア田町店での
打ち合わせの様子



しずてつストア田町店での
調査の様子



作成した商品 POP



以上の活動をまとめ、7 月末に静岡県高校生商業研究発表大会で研究発表し、準優勝を受賞し、その後の東海大会（名古屋市）では優良賞を受賞した。3 年ぶりに開催の「世界お茶まつり in 静岡 2025 秋の祭典」（会場：グランシップ）において、3 日間の出店と茶学術研究会 40 周年記念シンポジウムと全校生徒を対象にプレゼン発表を行った。今後も生徒とともに研究活動に試行錯誤しながら取り組み、次の課題に挑む姿勢や、壁を乗り越える勇気と決断力、推進力を身に付けさせたい。ビジネスの現場でさまざまな立場の方からいただく叱咤激励こそがビジネスの学びの理解を深める貴重なきっかけとなった。研究助成をいただけたことにより、生徒とともに貴重な経験ができたことに感謝しています。



↑ 店頭に掲示したボード



シンポジウムにおける発表の様子



世界お茶まつりでの販売の様子



世界お茶まつりで販売した粉末茶商品

地域の課題解決に向けた食サービスの開発

1 研究目的

これまで本校生活創造デザイン科では、地域の特産品を活用したレシピの考案を行ってきた。今年度は視野を広げ、地元の魅力をさらに発信できるようなレシピや食サービスの考案を通して地域理解を深め、より自分自身の住んでいる御殿場に愛着を持つことを目的とする。

2 研究方法

- (1) 地域の課題を明確化するために地域の課題を発見するためのフィールドワークを行う
- (2) 課題解決に向けた食サービスの検討やレシピ開発を行う
- (3) グループで試作を行い、レシピを改善
- (4) 出来上がった商品について教員に試食していただき、評価を頂く
- (5) 頂いた評価をもとに今後の改善や展望をまとめる

3 研究成果

5つのグループを作りそれぞれが地域の課題を調査し食サービスの検討を行った。そこで挙げたものは①外国人が増加していることから世界中の料理を提供できるレストラン、②御殿場の自然を活かしたドッグカフェ、③少子化に伴い家族で楽しめるレストラン、④若年層の人口流出を防ぐためのカフェ開発である。それぞれの班で提供するサービスとレシピを検討し、顧客となるターゲットの明確化や原価計算を通して収支の見込みなど具体的なイメージをもってサービス開発を行った。その結果、生徒が発案者ものを以下にまとめる。

①外国人労働者の増加に伴い、外国籍の方が増加していることから本場の味を御殿場に住みながら楽しめるように本格的な調理に挑戦した。また、海外旅行に行きたくても行けない日本人に対して手軽に外国気分を味わえるように日本人が楽しむことができるように細かな説明をつけるなどして親しみやすい提供の仕方を考案した。その中で特に目玉となる商品が皮から手作りをしているケバブである。こちらは実際に御殿場にあるケバブを販売している店舗での試食を通して、より本格的な完成度となるように研究を重ねた。(図1)



図1

②御殿場に自然を活かすことと現代の社会問題であるストレスの軽減に焦点をあて、犬がもたらず精神的な安らぎの中食事を行うことで精神的な疲労回復に繋げることを狙いとした。そのため、提供する食事は甘味に特化し、スイーツを楽しみながら自然の中で動物を触れ合うことで大きな精神的な疲労回復を見込んだ。(図2・3)



図2



図3

③家族で楽しめることに焦点をあて、宇宙に関する学習ができるレストランの開発を検討した。具体的には御殿場の美しい星空を観察しながら、食事を楽しみ学びと食事の両方を行うことで家族の満足度を高められるのではないかと考えた。食事は宇宙に親近感を持てるようなお子様向けメニューを開発した。(図4・5)



図4



図5

④こちらの班では市内の中華料理屋に注目をした。地元で長く住む人には味が知れ渡り愛されているが、若い世代には入りづらい印象を与えてしまうことを問題視し、親しみやすい店内の雰囲気やメニューの開発に挑戦した。(図6・7)



図6



図7

4 まとめ

従来の生活創造デザイン科では、職業人としての知識・技術を身に付けることが求められてきたが、本研究を通して、地域社会への貢献のために知識・技術を活用していくという新しい学びを検討することができた。また、本校の特色である地域に密着した教育活動を実現することができた。今後は郊外で実践できる場を設けられるような活動を行いたい。